

社会イノベーション研究  
第10巻第1号(81-112)  
2015年1月

2014年10月10日掲載承認

# メルッチ社会理論の再構成 社会認識の「新しいパラダイム」へ

長谷川 啓 介

## 1. 現代社会理論の困難とメルッチ

現在、われわれはどんな時代、どんな社会を生活しているのか。20世紀後半、古典期社会理論から課題を引き継ぎ、矢継ぎ早に新たな社会理論や思想が展開されたのに比して、現在は社会学の議論の中心を新たに設定するような理論的提案を即座に思い浮かべられなくなっている。それ以後の代表的な理論家や思想家の名前を新たに挙げるのが難しいことは象徴的だろう。もちろん、既存の理論のポテンシャルはまだ使い尽くされていない可能性はあるが、停滞感は否めない。

その中で、本稿は、アルベルト・メルッチの理論を改めて取り上げて検討する。なぜ今なおメルッチなのか。手掛かりになるのは、メルッチが、現代社会論に取り組む前提として、現代社会学が現代社会を定義する実質的な理論を失っていることをはっきり認めるべきだ、としていたことである。当時意表を突くようなものであったこの主張は、今日の社会理論の現状を背景にすると、今こそむしろ再検討を要請しているように思える。

メルッチは、現代社会理論の困難を「ポスト～」「ネオ～」などの接頭辞を付け足すことや「リスク」「リキッド」「システム」<sup>1)</sup>といったメタファーによ

---

1) メルッチの日本への重要な紹介者である山之内も「システム社会」という把握を示していた(山之内1996)。これはルーマンの社会システム論とは峻別すべきだろう。ルーマンもま

る言語的操作でごまかすべきではなく、むしろ、それらを現代社会（学）<sup>2)</sup>の弱さとしてはっきり認めるべきであるとしている。このこと自体、現代社会で大きな変動が起きている兆候であり、現代社会理論の出発点となるべきだというのがメルッチの主張である (C89)<sup>3)</sup>。「この行き詰まりから抜け出す第一のステップは、言語上のごまかしの背後にある問題の大きさを認めることである。むしろ、われわれの既存の概念ツールの弱さから目を逸らさず、そのことを明示的に問題化すれば、新たな理解の出発点となり、やがてその改善にもつながりうる」(C90)。

## 2. メルッチのテキストの難解さ

メルッチの議論を追いかけると独特の困難を味わう。その箇所その箇所で行っていることは分かるし魅力的ですらあるのだが、議論が全体として何を言っているのか、しっかりと掴んだという感覚がなかなか得られない。メルッチ自身が現代社会を把握する困難を明示しようというように、メルッチを読む上では、メルッチの議論を把握することの独特の困難をまず確認すべきであろう。自分の都合のよい部分だけを既存の枠組の補強に使えば、メルッチの問題意識を損なってしまうだろう<sup>4)</sup>。

---

た「空席の社会理論」を明確に意識していた点で、メルッチと問題意識を共有していたと言える（長岡 2006 参照）。

- 2) 社会学が一応社会の反省を担う専門分野だとすれば、社会学に社会理論が不在であるなら、その社会も理論的反省を持たないということができるだろう。制度的な狭い意味の社会学を越えて広い意味で見ても（たとえば現代思想や政治哲学なども含めるとしても）このことは妥当するように思われる。
- 3) メルッチのテキストへの言及が多数に上るため、*Challenging Codes* は C、*The Playing Self* は P、*Nomads of the Present* は N と略す。また言及する際は直接引用する場合もあるが、適宜パラフレーズし、該当頁を示す。その際基本的に翻訳は文脈に合わせて筆者が行い、訳書がある場合、該当ページをコロンの後に示す。原文のイタリック箇所は傍点を附した（強調はすべて原文である）。
- 4) この点について、新原も『プレイング・セルフ』の「訳者あとがき」で、「メルッチの文章そのものは、既知とされているものに関するオーディナリーな叙述として極めて安定している。しかし……文章の中に不均衡な均衡が動的に存在している。……きわめて分厚い叙述であるにもかかわらず、隙間や裂け目をもった表現ともなっている。読み手の側にとっては、「境界領域」の想念への到達は困難を極めるが、他方で理解可能な (intelligible) 部分のみをつなぎ合わせて読むこともできるが故に、誤読される危険性を常にはらんでいる」(243) と指摘している。

メルッチ自身も警告している。「本書はわかり易い単刀直入な語り方をしていないことに読者は注意してほしい」(N13: xxxxi)。「本書は、これから構築されるべき理論という不確実な領域への冒険となる」(C3)。「未踏の地では常にそうであるように、そこで見出されるものは未だはっきりとした姿を持っておらず、それゆえアンビバレントなままである」(P5: 7)。

現代社会理論の弱さを現代社会の特徴と描き出そうとすれば、議論は再帰的にならざるを得ず単刀直入には語りえないし、未だ言葉にしえないものを言葉にしようとするを主要課題とすれば、その理論はジレンマ、アンビバレンス、パラドクスに充ちるだろう。それは、彼の議論を魅力的にすると同時に、「要するにどっちなのか」と性急に結論を求める読み方には隔靴搔痒の感を与えるであろう<sup>5)</sup>。

したがって、メルッチ理論を読み解くには相応の注意が必要となる。ただし、彼の問題設定を踏まえれば、一定の困難が内在する不可避性は認めるとしても、他方でそのことはメルッチの記述自体に矛盾や混乱がないことまで意味しない。

実際メルッチの議論はすぐ気づくように、抽象度が高い部分が多い上に、彼自身も比喻やキーワードの語源に言及することで、あたかも説明をしているように見せるところが散見される。「現在に生きる遊牧民」「プレイング・セルフ」「プラネタリー社会」「メタモルフォーゼ」……。何か魅力的で肝心なことが言われているようで、明解なわけではない。もちろん、なかなか明確に言葉にならない新領域を言葉にする努力なのかもしれない。しかし、その内実を明らかにしなければ、それこそ理論の弱さを言葉巧みに言いくるめることになりかねない。

本稿は、まず現代社会理論の不在を敢えて引き受けることから理論を再出発させることの意味を掘り下げていくことで、メルッチの社会認識上の特徴的スタンスを確認する。次に、そのスタンスに即してメルッチの重要論点を統一的に理解することで、潜在的に「新しいパラダイム」の構成要素が用意されていることを見る。そして翻って、メルッチ自身が明示的に採用する「パラダイム革新」のアプローチは不徹底で、依然「古いパラダイム」の引力圏にあるため、潜在的な「新しいパラダイム」を十分に取り出せていなかったことを検討する。そのようなメルッチ理論の再構成を通して、社会認識の「新しいパラダイム」

5) それがメルッチの議論全体を支えるパラダイム革新の試みの当然の帰結であることについては、筆者もすでに触れたことがある。長谷川 (2006) 参照。

の礎を明らかにしたい。

### 3. 「文化的構築性上昇」と「現代社会理論不在」の関係

メルッチは現代理論の弱さを積極的に認めるという出発点から、実際にどういふ議論を展開しているのか？ 現代社会を全く未既定のまま議論していくことはできない。そこでメルッチは暫定的であることを明記しながら、現代社会を「情報社会」とか「複合社会」と定義する(C90)。とはいえ、「情報」や「複合」という言葉は、メルッチが現代社会にどう探りを入れようとしているのか手掛かりを与えてくれる。

実際、彼のテキストには、現代社会が文化的ポテンシャルを高め、それに伴い再帰的構築性を史上ないレベルにまで高めているというテーゼが繰り返し現れる。「われわれが生きる現実はその全体が文化的構築物となり、その現実をわれわれがどう表象するかが、われわれと世界との関係のフィルターの役目を果たす。人類史上初めて、この主張が文字通りの真実となった。実際、今日われわれが言及する世界は、地球惑星規模のグローバルな世界であり、このことは情報、つまりわれわれが自らの世界を自らに向けて表象する文化的プロセスによってのみ可能となっている」(C8-9)。時間、身体、医療ケア、個人的欲求、環境問題、青年や高齢者の問題から新しい社会運動に至るまで、メルッチの主要な論点の多くがこのテーゼを軸に展開されている。それらの議論一つ一つは鋭い洞察を含むものと言えるだろう。

ただ、メルッチの、現代社会理論の弱さ・不在を認めようという主張は、既存の現代社会理論の中身を詳しく検討して論証されているわけではなく、いわば十把一絡げに切り捨てる大胆な問題提起になっている。そうである以上、メルッチの理論はちょっと鋭い洞察を示しただけでは物足りないだろう。他の理論と力点の違いではなく、決定的違いを示せなければならないはずである。逆に言えば、メルッチの現代社会理論の弱さ・不在という問題提起を重視しなければ、彼の理論はその他の理論と概ね同様の評価をされたであろうし、実際そのように理解され、そしてそれらと同様に現在は色褪せ、ポテンシャルが未消化のままに残されているのではないだろうか。

しかし、少し補助線を引いて考えてみると、そのテーゼと現代社会の理論の弱さ・不在という問題提起は実は内的につながっていることが見えてくる。

メルッチが強調するように、われわれ自身が社会をどう表象するかが社会の在り方に決定的な帰結を持つようになった現代社会では、当然、文化・知識・情報の在り方が問われる。そのような「情報社会」が話題になる同じ頃、「カルチュラル・スタディーズ」などを中心に構築主義が大きなインパクトをもたらしたし、メルッチもそのような流れの中で理解された節もある。もちろん知識の構築性については、すでに知識社会学やイデオロギー論で問題にされていた。どの知識も現実をナイーブに「客観的真理」として特権的に表象することはできない。様々な知識は複合的に絡み合い、現実を一筋縄で理解することは難しいし、社会関係の様々な布置連関と関連付けられない知識を考えることも難しい。

そう考えるとき、知識社会学や構築主義には常識に属するようなことが、社会全般で「文字通り」の意味で重要になったのが、メルッチの言う「情報社会」「複合社会」であると理解できるだろう。知識・文化・情報は現代社会に固有のものではないし、それが社会的に構築されたものであると言えば、それもどの時代にも言えることであろう。だが、そのことの意義がことさら高まり、社会の中核原理のようになったのが現代社会というわけである。

そういう社会になったとすれば、当然その中にある知識の一形態である社会理論もナイーブに現実を語ることは難しくなる。むしろ、丁寧に現実を把握することを求められる社会理論だからこそ、その困難は顕著なものとして経験されることになるだろう。とすれば、文化的構築性の増大と適切な現代社会理論の不在という二つの論点には内的連関を見出せる。

さらに関連するテーマとして、かつて「イデオロギーの終焉」や「大きな物語の終焉」が論じられたことを想起できる。「終焉」論が議論されるその都度、その「イデオロギーの終焉」論こそイデオロギーではないか、「大きな物語の終焉」こそ大きな物語ではないか、という反論パターンが繰り出されてきた。しかし、この形式に至るとき、議論が次第に行き詰まっていく傾向があったように思う。

「終焉論」は、イデオロギーの相対性を克服したり、ポストモダンの相対性を端的に肯定する形で終了させるよう提起されたが、結局のところ、それらが自己否定な内容によって遂行的には自己を存続させる「否定神学的」(東 1998)な試みだったと暴かれていく。

しかしそう暴かれた後どうなるのか？ その暴く試み自体は、イデオロギー

や大きな物語とどういう関係にあるのか？ そのような議論は決着がつくというよりは、果てしない背進，相対化を続ける消耗戦となり，やがて不毛感だけが浮き彫りになって残る。今世紀の思想や社会理論の明らかな停滞感もその結果のように見える<sup>6)</sup>。

より良い思想や社会理論を追及して，既存のもののナイーブさ，吟味されていない前提を暴き出し批判的に克服していく試みは，相対化の圧力を増大させる。しかし，その傾向がある一線を越えれば，何か積極的に打ち立てるよりも相対化の圧力が勝るようになり，何も積極的に言わないのが最も積極的な思想や理論に見えるに至るだろう。そうなってしまうと，実質的内容のある社会理論を打ち立てることが困難になるのも十分理解できる。だとすれば，現代社会の理論が行き詰っていることをまずは認めたほうが良いとするメルッチの一見大胆なスタンスも，同時代の現代思想の問題意識とも呼応していることが見えてくる。

このようにメルッチ現代社会理論の弱さ・不在の強調と文化的構築性の増大への注目は相互に内容的に関連しあっている。「知識は現実を支配する因果的連鎖を線形的に映し出す鏡ではない。むしろそれは（その主題の）モデル化と（その道具の）自己モデル化の循環関係である」（C394）ことを踏まえると，どちらの論点が基底のかと考えるべきではないだろう。社会における情報の重要性が増したが故に現代社会理論は行き詰まったとか，現代社会理論の行き詰まりを強調したいがために社会の文化的構築性を強調しているとか，どちらか一方から他方を線形的因果的に説明する関係を想定するよりも，むしろそのような想定自体の克服が目指されているとみるべきであろう。

とすれば，このような循環関係をつい悪循環と同一視しがちだが，そういう見方が疑問視されることになる。むしろ循環関係を否定しようと，最終審級や絶対的基礎を探そうとすること自体が，循環関係を悪循環に変えていると捉え返すこともできる。循環関係を積極的に認めることは，視点の転換，問題設定自体の変更を伴う。問題は，循環を抜け出す最終的根拠を探すことではなくなり，むしろ循環が悪循環になるか好循環になるのか，それはいかなる場合か，

6) 大澤は，超越的視点（大澤の用語では「第三者の審級」）が，不断に普遍化していく広義の資本の運動の過程に置かれるのが近代の特徴であるとした上で，既存の超越的視点を相対化してより普遍的な超越的視点を調達しようとすることで，超越性を確保し続けようとする，その資本の運動そのものが，やがてそれ以上普遍的な超越性を指定する困難に突き当たり，消耗してしまう逆説を描き出している（例えば，大澤 1996: 168-80）。

といった形で新たに設定される。

#### 4. メルッチの構築主義の特徴

以上を踏まえて、メルッチの構築主義の性質をより詳しく検討してみよう。『現在に生きる遊牧民』第一章が「集合行為：構築主義的見方」であるように、メルッチの議論が構築主義的であることは明らかである。構築主義自体には今や特に目新しさはない。それを社会運動研究の領域に持ち込んだところがメルッチの独自性であるとは言えるとしても、それに留まるならば、現代社会の理論全般の現状を批判する必要もないはずである。むしろメルッチの構築主義がどんな特徴を持つかが重要になるだろう。

その特徴自体は文化／自然の議論を見ることで比較的容易に特定することができる。文化と自然の関係は歴史的に転換し、かつて自然・所与とされていたものも、もはやどこにもナイーブな形で存在できなくなり、全ては「文字通り」文化的構築物になった。これが基本的に構築主義的アプローチであることは間違いないだろう。しかし、その際メルッチが繰り返し指摘するのは、だからといって自然がなくなるわけではない、あらゆることが文化的に構築可能になるわけではなく、どこかに自然の制約はあるということである。何が自然か、どこに制約があるのかこそ、まさに文化が構築せざるを得ないものとなる。時間論の文脈で次のように言う。「今やわれわれは、自分自身の内なる自然に至るまで自然に介入する力を手にしてしまった。その結果、もはや自然の時間は存在しない。文明の必要悪から逃避できる純粋な自然を未だに再生できるなどという幻想を膨らませても無駄である。にもかかわらず、自然の時間は依然として存在する。それは、自覚と責任を持つことによって文化的に保護しうる。ここに、われわれが文化的に自然になりうるというパラドクスと挑戦がある。」(P22: 33)<sup>7)</sup>。

ここで「自然」に託されている意味をより一般化して言えば、構築の前提には構築されざる何か、いわば構築の「限界」や「外部」があり、構築は常にそ

7) メルッチは単に文化の構築性の高まりを、それこそナイーブに言っているのではなく、ルーマンや大澤らが言及するスペンサー＝ブラウン (1996=1987) に即して言えば、文化／自然という区別が文化自体に「再参入」したこと、それで生じるパラドクスを問題にしていると言えるだろう。メルッチ自身には、ベイトソンの影響が強いと思われるが。

れによって可能になっていると言えるだろう<sup>8)</sup>。とはいえ、その「限界」「外部」がそれ自体として「客観的」にあるわけではなく、それは常に構築作用を受けてしか実在しえない。そういう意味での構築主義がメルッチのスタンスである<sup>9)</sup>。その「限界」を弁えない、あまりにラディカルな構築主義についてメルッチは次のように述べている。「構築プロセスにおいて限界を強調することは、ラディカル構築主義のリスクを避けることである。……実際、ラディカル構築主義は社会的行為の関係性を破壊することになってしまい、より洗練されたものだとしても、主意主義的パラダイムの最終バージョンとみなされることになる」(C393)。

構築主義をナイーブに追及すれば、何でも随意に構築できると主張せざるを得なくなる。そのような「主意主義」は、ナイーブに外部の現実を反映できるとする客観主義の裏返しに過ぎず、その元にある客観／主観の二元論は維持されたままだということをメルッチは言っているのだろう。このことは、メルッチの社会運動研究の基本的モチーフが二元論の克服にあり(C15, 381)、そのブレイクスルーが、集合的アイデンティティの構築プロセスを観察することであったこととつなげて理解できるだろう。

関連して、認識論的に言えば、素朴な実在反映論を捨てるのは良いとしても、それは同時に真理概念を再設定しなければならない。客観的現実を鏡のように反映するのが「真理」とはもはや言えないからといって、それを裏返した「主意主義」的立場は、真理が極度に主観化するか、真理などない「何でもあり」という立場に至り着いてしまうだろう。それはポストモダン思想の行き詰まりを想起させる。

それに対し、メルッチは「状況づけられた認識論」を提起している。客観と主観の循環、あるいは客観を見る観察者と主観的に行為する当事者の循環関係

8) メルッチが現代社会が情報の力でグローバル化したことを一方で強調しながら、その世界を「プラネタリー社会」と呼ぶのも、文化的構築力の増大は地球環境によって根本的に限界づけられていることも強調しようとするものであろう(P2, 17, 118: 3, 26, 162)

9) ルーマンのシステム論が、システムのみを扱うのではなく、常にシステム／環境の区別、あるいはそのシステムへの再参入を問題にし、システムに環境は直接手を伸ばすことはできず、環境は常にシステム自身の構築物であるとしていることも想起できる。ただ、ルーマンは「システムは存在する」と出発している(ルーマン 1984=1993-5)。「環境が存在する」と出発しているメルッチと同じことを言っているようでもあるし、力点が違うようにも思える。少なくともメルッチをこのように理解することで、対立させるのではなく、対比させながら両者の理解を深める手がかりが得られるように思う。



があるとしても、観察者はその外部に立つことはできない。しかし「そのような循環は、それがお互いのそれぞれの「立場」の不完全性と限定を認識し、そのことについてメタコミュニケーションできるならば悪循環ではない。状況に限定された知識は、その限定性の自覚を伴う時「真理」となる」(C 396)。ここから、「真理」はあるということ、それは循環を否定するものではなく、そして悪循環に陥らないものであり、そのためには知識の自己完結性には限界や外部があることを認めることが鍵であるとメルッチが考えていることが読み取れるだろう。

## 5. メルッチの<スタンス>

メルッチの構築主義は、構築の可能性だけでなく、その限界や外部を強調していることに特徴がある。しかし、現代の社会理論に取り組む者にとって、客観的現実の反映などなく、何でもありの主観性に還元もできないことは基本認識とっていいだろうし、情報の重要性が増し、社会の文化的構築性や現実の表象のされ方が問題になっていることを否定する者や、逆に「現実などない」と言い切るスタンスに完全に立とうとする者も、そうはいないだろう。むしろ、「構築の可能性もあるが、それには限界もある」というのは広くコンセンサスを得られる穏当な立場に見え、逆に言えば、それを指摘するだけなら平凡な主張に聞こえる<sup>10)</sup>。

しかし、おそらくそうではない。理解を深める鍵は、メルッチの「限界」の強調を真剣に受け止めることだと思われる。一見基本認識に見えるこの認識論上の立場を表面的にではなく、徹底的に実践しようとするところに、メルッチ独自のポテンシャルが見出せる。

自然は純粹に表象することはできず、常に文化的構築されている。およそ外部とされるものはすべて文化的構築の内的な産物であり、そのように取り扱わねばならない。このような言明は20世紀の思想の言語論的転回の主張と軌を一にしており、言語の外部は存在しないという前提は構築主義やポストモダン思想のバックボーンとなっていた。メルッチ自身、このことを受け入れてい

10) 構築主義については既に様々な検討がなされている。本稿はメルッチ理論の特徴を大筋で示すことを主眼としているため詳細には立ち入らないが、さしあたり上野編(2001)、中河ほか編(2001)など参照。

ったからこそ文化的構築性へ注目したのだろう。

しかし他方で、メルッチは、それでもなお「自然はある」「言語の外部はある」と強く主張しているように見える。身体を論じる部分で、次のように言っている。「身体的経験には常に言語に翻訳できない部分がある。感情、情緒、感覚、動きを他者に完全にコミュニケーションすることはできない。なぜなら、それらは人間経験の深奥部にある最も親密な部分を表しているからである」(P151: 208)。

もちろんこの主張はパラドキシカルである。そのような経験があることは、定義上論証不可能であろう。この主張に同意しない他者に向かって、そもそも他者に伝えられないことをどう伝えたらよいのか？「人間なら誰でも自分の経験に耳を済ませばわかるはずだ」などと言えば、当然その言説が、人間的経験のナイーブな独断的構築だと相対化されざるを得ないだろう。にもかかわらず、なぜメルッチはこんな「ナイーブ」なことを言ってしまうのか？

だが、いったんメルッチの立場に立ってみれば、次のように反論できるだろう。他方で、このような「言語に還元できない人間的経験」は存在しないということが、われわれの世界の「客観的事実」であると断言することもまた、文化の構築性や視点拘束性を踏まえる者なら誰も言うことはできないだろう、と。メルッチの立場から見れば、それを認めない構築主義者こそ「ナイーブ」だと言えるだろう。

どちらが正しいのか？ ここで懐疑論に対し構成主義的認識論の基礎を打ち立てたカントのアンチノミー論を思い出すべきであろう（Kant 1787，熊野 2002，石川 2009，竹田 2010）。思考能力（理性）を備えた人間は、経験的に検証して決着をつけることのできない、超越論的な問いをそれでも考えてしまう。それにはしかし原理的に決定的な答えがない。メルッチが言及している「人間経験の深奥部」の有無は、まさにそのような問いを構成しているといえるだろう。

そのような経験はあるともないとも言える。それは決着のつかない問いである。が、そのような問い自体が立ってしまうことを否定するのは難しい。とすれば、その問いに対して、どうしても相容れない二つのスタンスが生じる。逆に言えば、このような問いに照らす時こそ、メルッチの＜スタンス＞は明確に炙り出されると言えるだろう。メルッチのスタンスは、そのような経験が「ある」という立場にコミットすることである。

それは、素朴な実在論者とは異なるだけでなく、一般的な構築主義の立場とも異なるだろう。構築主義を受け入れながら、他方でその外部の現実には「それでもある」と言い切るのは、「普通」の構築主義者にはためらわれることではないか。しかし、そこを踏み込むところに、メルッチを読み解く鍵があると言えそうである。

## 6. 社会理論の抜け道

メルッチの独自のスタンスが、構築性を強調しながら、同時に限界・外部の实在を積極的に打ち出すことにあるとして、それは実際にどのような違いを生むのか？

現代社会はその理論を十全に持つことができないでいる。その弱さを認めることがメルッチの出発点だった。現代社会理論もまた、その社会の現実を「客観的」に反映することができない。自分だけその現実の外に立って、外部からそれを見るということもできない。したがって、社会理論、理論家、研究者、知識人は一般人よりも社会の現実をよりよく反映できるという想定はもはや成り立たない。そのような想定に立つすべての理論は行き詰まる運命にある。もちろん、それを単に裏返した庶民こそすべて知っているという議論も同じ穴の貉ということになる。

社会的現実と社会認識は循環関係にある。もはやそれを否認することはできない。社会的現実とは、文化的に構築され、それを最も洗練された形で行うことが期待されるのが社会理論であろう。しかし、社会理論はその構築を自己完結すること、自己を根拠づけることはできない。それはともすれば「何が現実かわからない」という状態に至り、その状態こそが現実だと言い募る理論が最もラディカルに見えるかもしれない。

しかしメルッチは、それでも理論の「外部」に現実はあると置く。その現実を直接・純粹に映し取ることはできない。むしろ「それ」自体様々に構築される。しかし、まさにその構築自体は現実である。現実がどう構築されるかは、どこまでも争えるとしても、現実についての文化的構築<sup>11)</sup>が繰り広げられる

11) 外部、限界、自然、現実があるが、それは常に文化的構築の対象になるとすれば、その文化的構築プロセスも、不可避の現実となるだろう。メルッチの「対象や関係に意味を与える能力としての文化は、人類の運命に関する問いが発せられる破棄不能の枠組である」(P59:

という現実の存在については、経験的な検証で決着がつくことではない。それはすでに最初のスタンスの段階で選択された前提である。とはいえ、それは経験そのもののレベルではなく、経験の可能性の条件に関わるコミットメントであり、前者のレベルで特定の経験的立場にコミットするという意味ではない。

こう考えると、社会理論や思想が相対性の泥沼、反省の無限背進の問題に苛まれている時、一つの抜け道が現れる。その問題を現実へと投げ返すことが可能になる。現実の上で、何が現実か、どこに所与や限界や自然があるのかが構築される。しかし、どの記述、構築も相対化されうるし、根拠を示そうとすれば反省を迫られる。ということは、現実の中には必ず複数の現実の記述、構築があり、それは必然的に互いに相容れず、緊張や紛争を常に孕んでいる。あるいは、特定の立場が支配的になったり抑圧されたりもするだろう。

理論や思想上の相対主義の問題は、現実の問題へと投げ返され、そこから翻って、理論や思想も他の様々な現実定義の争いと同様、その現実の中の一部と捉え返される。そのような現実定義の争いの起こる場を社会と呼んでもよいだろう。社会理論や思想を行き詰らせた相対主義の問題は、その社会の中で常に既に行われている現実的定義の争いをいかに理解するかという社会学的問いに転換されることになる。

## 7. アイデンティティ論へ：問題設定の転換

そう考えると、メルッチがアイデンティティの問いを社会学の中心問題に据えたことは必然に思える。それは個人のレベル、集合的アイデンティティのレベルだけでなく、社会全体のレベルでも問われている。それがまさに現代社会の明確な定義の弱さ・不在を積極的に認めることとして問われていたのだと、メルッチの〈スタンス〉を踏まえると見えてくる。

既存の理論をバッサリと切り捨てたのに、メルッチ自身が出す代案が平凡で物足りないという異議に対しては、いまや次のように言える。メルッチが言おうとしているのは、現代社会を客観的に十全に把握できるような実質的理論を用意するという問いに対して、既存の答案が不十分だから自分がより優れた答案を出すということではなく、その問い自体を変更することが決定的に重要だということである。

---

83) という発言は、そういう意味と理解できるだろう。

集合的・個人的アイデンティティの議論も従来の議論の「弱さ」を認めることがポイントとなっている。

メルッチは一般には「新しい社会運動」の理論家と理解されていると言ってもよいだろう。1960年代末以降に登場してきた、いわゆる「新しい社会運動」をメルッチも主要な研究対象にしている。しかし、産業資本主義社会における社会主義運動に典型に見られたような「古い」社会運動が弱体化したのを受けて、その座を新たに占めるという意味で新しい社会運動を考察したわけではない(N202: 266)。むしろ、新しい社会運動の登場は、従来の社会運動観、社会運動概念、その背景となる理論的枠組が不十分になったことのメッセージと受け止めなければならない。さらに言えば、その新しい社会運動も「衰退」「弱体化」し「運動の終焉」まで言われることは、古い前提からの問いを維持した視点から見れば嘆かわしいことかもしれないが、むしろその問題設定自体を変えることを求めているとみなすところにメルッチの社会運動論の特徴がある。

従来の枠組に合わせて「社会運動」を探そうとするのではなく、現実の変容に合わせて、社会運動観やそれを支える理論枠組を問い直すことが必要であり、そこで新たに問われたのが、「われわれ」という集合的アイデンティティはいかにして構築されるか、という問いであった。運動を実体として捉え、それを構造的に説明するか主観的意識から見るかという二元論は、可能性と制約の場を、行為者たちが対内的にも対外的にも緊張や紛争を孕みながら定義し行為していく循環と捉え返される。

個人的アイデンティティも同様である。個人の「アイデンティティ」が弱体化した、「主体」が「終焉」したといった議論もまた、その視点が個人は確固たるアイデンティティの中核をもって社会に主体的に関わる実体であるという従来の「アイデンティティ」「主体」概念に拘束されていることを示す(P28-36: 41-52)。もはや個人のアイデンティティもまた、あるかないかといった実体的な問題ではなく、それ自体が当の個人によってどのように循環的に構築されているかが問われなければならない。

現実が文化的に構築され、唯一絶対の現実はない。それでも人々が生きる現実の世界はある。しかし、「現実でも想像でも、われわれは無数にある世界に参加している」(P43: 60)。相対主義、不確実性の問題は現実に戻されるが、その時、われわれは無数の世界の中ではっきりした答えのないまま、それでも選択し意味を作り出しながら生きている。

社会全体であれ、集団であれ、個人であれ、今や自らの行為の意味、自らにとっての現実を、自分が何者なのかを、複数性や不確実性やパラドクスやジレンマの中で自ら構築しなければならない課題に「文字通り」さらされる。そのプロセスは様々な葛藤、緊張、矛盾、トラブルを抱え込みながら、上手くいったりいかなかったりしながら進むことになる。

その構築は、常に「可能性と限界の場」である現実の中で行われる<sup>12)</sup>。その「現場」にある様々な要素やその関係を行為者たちは自ら認知し、状況を定義し、それに基づいて行為していく。しかし、その現場は決して一義的「客観的」に定義できない。そこに含まれる要素や関係は絶えず変化しているし、自らの行為によっても変化していく。したがってアイデンティティの構築は、状況の変化に応じて定義を絶えず修正していく循環的プロセスそれ自体となる。「アイデンティゼーション」というこなれない言葉を自覚的に導入することで、メルッチが言おうとしていることはそう解釈できるだろう (C77; P31: 45)。

どこかに客観的本質を求め、それに固着することで循環から抜け出ようとせず、柔軟に現状の諸要素の捉え方を変えていく。それは確かに、「現在」の中にある諸可能性の間を遊動する「遊牧民」と言えるかもしれない (P43: 60)。

それは「アイデンティティなどない」ということではない。それもまた、アイデンティティの本質を客観的に定義して固定させようとする従来の問題設定の枠内で、自己否定的な内容を答えとしたに過ぎない。ポイントは、問題設定の変更にある。アイデンティティの問いは、絶対的な答えを出すのではなく、柔軟にその都度アイデンティティを作り替えていく循環プロセスの性質と関わることになる。とすればアイデンティティは、確定的な答えがないまま、問いだけが残る。その問いに対して柔軟にその都度答えを作り、また変化させていく。どれかの答えではなく、その探究プロセス自体がアイデンティティ、すなわち「アイデンティゼーション」である。とすれば、その問いを軸としながら、その軸の「遊び」の範囲を自由に戯れ揺れ動く自己像を表したのが「ブレイング・セルフ」と言えるだろう (P3: 4)。

そのアイデンティゼーションは常に既に起きていることである。しかし、それがうまく循環するとは限らない。答えを与えることで幻想的にその循環から抜け出たつもりになることは、結果的に悪循環をもたらす重要な要因だろう。他方、自らの状況に潜む「限界」「弱さ」を糊塗して、暫定的であったはずの

12) ここでも構築の多様な可能性だけでなく、「限界」が強調されている。

アイデンティティの枠内に留まろうとするのではなく、それを積極的に引き受け、必要であれば変わる勇気をもってこの不確実で偶発的な循環性の中に投げ置かれているという現実を引き受けることは好循環の要因となるだろう。メルッチのいう「メタモルフォーゼ」(形式を変えること)とは、後者を示そうとする言葉と理解できる (P50: 71)。

そして、そのことが翻って、社会・集団・個人を見る認識枠組のメタモルフォーゼ(パラダイム革新)を要請する。社会の客観的現実、変革の歴史的主人公、確固たる主体を追い求める概念や理論枠組の弱さを認めることで、問題設定を転換し、それに向けて概念枠組を組み替えていこうとする認識上の実践を引き受けていく。そのことが、また循環的に、社会の当事者たちのそのような試みの意義や困難の理解を深める助けになるであろう。

## 8. 社会的現実があることの「驚き」:「社会運動」概念のメタモルフォーゼ

社会が、「アイデンティゼーション」の課題と向き合う個人たちが集う場所だとすれば、自分以外の他者もまた、同じような課題に取り組む個人である。しかし、これは事態を複雑化する。ますます個人間の差異が強調され他者も「文字通り」他者として現れ、翻ってそれが個人化を推し進める。個人による個人の構築という課題は、同じような課題を担った他者たちとの関係の中で行われる。個人にとって「他者」は「自然」と同様に制約条件ともなるが、その制約自体双方の個人によってさまざまに構築される。そのプロセスは、決して孤立した現象でもなければ、心理や実存の問題に還元できるわけでもないし、個人がその循環の中で自らをどう構築するか社会の現実の構成に重大な帰結をもたらす。その意味で、まさに「個人が個人になる」という「個人化のプロセス」(C218; P146: 200) は社会学の重要問題として精査が必要になる。

個人の内的アイデンティティの構築自体にも様々な葛藤や紛争が生じるが、そういう個人同士が互いに関係を構築していくなかで、社会が構築されていく。そのプロセスも当然自明のものではない。社会全体もまた、文化的構築性を増大させ、自らを循環的に構築している。しかし、社会全体のそのプロセスをすべて把握するのは恐ろしく複雑な作業になる。

しかし、そこには規範や制度が発達し比較的安定的に現実が再生産される領

域と、社会性・集合性を自ら創造するという側面が強い領域があるだろう。メルッチにとって後者が現代社会の特徴を精査する上で、特権的な領域となるという意味でも社会運動や集合行為が彼の研究の戦略的拠点となっている。

実際メルッチは「新しい社会運動」のインテンシブなフィールドワークを集合的アイデンティティの構築プロセスを観察するために考案された斬新な方法意識（C ch. 20; N ch. 10: 10 章）のもとで行っている。そして、アイデンティティ構築の中にある現実の多元性、それをめぐる葛藤や紛争を観察する中で、現代の運動における集合行為の個人化傾向とその文化的構築が自然への訴求を通して行われるというパラドクスを確認している（C95, 111）。

社会へのプロテストは、ますます個人が個人として自分なりの意味を獲得しつつしか関われないものとなり、また文化的構築性を強める社会への抵抗は、それを逃れていると想定された自然性をよりどころにする傾向をみせる。しかし、これはパラドクスである。運動の当事者にとって運動の個人化・自然化は運動に意味を持って関わるために必要である一方で、それは集合行為に否定的に作用するリスクとなる。個人的意味への拘りは、連帯や社会関係の中にいることの認識を難しくし孤立化へ、自然への拘りは、それ自体が文化的営みにならざるを得ないことの否認により、幻想的な観念への逃避をもたらしかねない。

しかし、メルッチは現代運動のこの「脆弱性」こそわれわれが取り逃がしがちな、現代の変動を示す兆候であると理解し、そのメッセージに耳を澄ます。この運動における紛争の個人化・自然化のリスクは、そのロジックを延長すれば、自ずと「個人が個人になるプロセス」の内部でも確認されるだろう。諸個人がそのリスクをどう対処するかこそ、現代社会存立の決定的な問題となる。つまり、社会と個人、文化と自然の二極性のバランスをとる困難の中で、諸個人がそれぞれ何とか自律的行為者として、同じような他者とともに生きるという現実を悪循環に陥ることなく構成することができるかどうか、そのプロセスの重要性を理解すること自体が重要である。

このプロセスは、従来の「社会運動」という概念のイメージには程遠く、もはや手垢にまみれたその名で呼ぶには相応しくない経験領域であろう。人がその人生を生きることは常に闘いだったかもしれない。が、それがまさに社会の存立に関わる「文字通り」の闘いとなったとすれば、そのプロセスこそ、まさに現代の「社会運動」なのかもしれない。

メルッチは「われわれの眼前にありながらほとんど気づかれないでやり過



されていることをよりよく見えるようにする視点を開発しよう」(P4: 6) とテキストを書き残した。その視点が見ようとしていたものは、ごく当たり前に見える社会生活が、絶対的確信を持てないあまりに人間的な弱さを備えたごく普通の人々によって、壊れるのではなく、今なお形成されている単純な事実であり、それこそまさに驚きだととらえることなのではないだろうか<sup>13)</sup>。

## 9. 認識と責任

われわれが根拠も確信もない弱さをそれぞれに抱えながら、それでも自ら自身と他者との共同の社会を構成していくことは、内田義彦 (1971: 102) が彼の市民社会論で「同類相憐れむ」感覚こそ、それを基礎づけたこと思い起こさせる。メルッチ自身も単に驚くだけではなく、われわれはその事実を自覚し責任を負うべきことをしばしば強調する。「地球上の生活はもはや神聖な秩序によって保障されていない。それは今や、われわれ全員の脆く心許ない手の中に委ねられている」(P128: 177)。

実際、近代市民社会は、自由で平等な個人が、互いにその価値を尊重することで構築されるものと構想されているだろう。しかし、近代社会がその方向へ向けて発展し、権利としてはかなりの部分確立しつつも、今日、その権利を現実のものとする困難に向き合っている。だからといって、近代の達成や価値を否定すべきではないだろう (Cf. P42: 59)。その権利を手にしたわれわれ自身が、自滅的に振る舞うことも十分ありうる可能性だとしたら、近代的価値を思い起こしたり、その困難に同類として向き合っている事実を自覚する責任を提起することも大事だろう。

しかし社会認識の議論の中に、価値や責任、倫理への訴えを持ち込むことは、アンビバレントでもある。見てきたように、メルッチの理論を支えている<スタンス>は原理的に客観的答えのない超越論的問いに対して選び取られている点で倫理的な選択ともいえる。そして、そのような選択をすることが、新しい認識を切り開いていくという帰結をもたらす。中立性を見かけをとることも一

13) メルッチは『ブレイング・セルフ』最終章を「驚嘆することへの賛辞」としている。また、ごく当たり前のことを驚きをもってとらえる視点は「現象学的」(P5: 7) といってよいだろう。『ブレイング・セルフ』は「日常生活の現象学」(P1: 1) であり、『コードへの挑戦』の社会運動研究は、集合的アイデンティティを実体化せず、その構築過程を眼差そうとする「現象学的アプローチ」(C389) を基礎としている。

つの倫理的な選択であることを否認することもまた、別の帰結を持つであろう。

他方、認識のためのスタンスをとることが倫理的でもあり、それが認識を支え深める面があるとはいえ、認識の問題が倫理的スタンス、価値の確認や責任感の問題に還元されるわけではない。価値や責任を自覚すれば、私たちは自らの現実の循環的な構成を首尾よくやれるわけではない。むしろ、価値や責任感を掲げることが、その循環にまみれている事実を否認し、あたかも現実の外側に立つ方便となるならば、遂行的な矛盾となる。認識と倫理は別物ではなく、それ自体循環的な関係にあるというべきであろう。

社会認識を専門とする者もその現実の内部にいて、自らの限定した立場を弁えながらも、その現実の循環的構成に関わって、何がその循環を妨げているのかを認識していく。その作業を進めることそのものが、その価値や責任を確認することであろう。

## 10. 補論：何が「パラダイム革新」を妨げるのか？

メルッチのプロジェクトは、新しいパラダイムを目指すものであった。メルッチは自らの作業枠組を「社会運動」概念に即して次のように述べる。「われわれが古いパラダイムに囚われている限り、それに有機的に組み込まれている言語を放棄することはできない。新しいパラダイムが確立すれば、古い問題は別様に定義され、それによりまったく新しい概念が生まれるに至り、古い問題自体がなくなる。しかし現状私は、居心地悪くても言語的曖昧さを暫定的に受け入れつつ、同時に、社会運動の観念を創造的な自己崩壊まで押し進める努力を強化するしかないと思う」(C29)。

しかし本稿は、メルッチのテキストの中に既に「新しいパラダイム」が潜在しており、それを引き出すことで、新たな視角・問題・分析方法・真理基準などが設定されることを確認してきた。その地点から改めてメルッチのテキストを捉え返せば、そこには当然、いまだ古い言語空間に捉われている議論を見いだせるはずであろう。

彼は既存の社会運動論が、新しい社会運動の登場を前にしても、従来の理論の修正で対応しようとしたり、資源動員論のように政治に還元しようとしてしまうことを批判する。そのような態度は、現代社会の新たな次元に根本的な矛盾が現れるという大きな変化が起きている可能性を、しっかり検討する前にア

プリアリに排除してしまうからである (C7)。そこでメルッチは、その問いのためのスペースを確保できる分析枠組を用意するという課題を設定する。「現代社会の理論の不在」を積極的に認めようとする態度もこれに由来する。そして、その態度を掘り下げていくことで本稿はすでに、メルッチの独自のスタンスを確認し、そこから新たな問いのスペースが開かれていることを確認した。

しかし、メルッチ自身が、この問いの確保のために明示的に採用したアプローチは、企図に反して「古いパラダイム」に引力圏に留まっているようにみえる。そのために潜在していた「新しいパラダイム」を十分引き出せていないことを以下では確認する。その背景を確認する作業は、翻って「新しいパラダイム」の特徴をより浮き彫りにしてくれるだろう。

#### 10.1 プレーキ 1:「中範囲の理論」への自己限定

メルッチが提案しているアプローチは、まず新しいシステミックな紛争の仮説を暫定的にでも立て、それを経験的に検証していくことである (C91)。その仮説は一般理論の形成に寄与しようとするよりも、古い枠組では捉え難い新しい現象に焦点を当て、経験的に研究するガイドラインと見るべきである。経験的検証を経てその仮説の妥当性が確認されたり展開されれば、やがて一つの理論の基礎となる。しかし、それはあくまで領域限定的な中範囲の理論である。「この循環的やり方は、既存のパラダイムの概念的限界を明らかにし、新たなパラダイムへの道筋を開いていく助けとなるならば悪循環にはならない」。

一見、これまで本稿で確認してきた循環論的構成に即した妥当な提案にも見える。しかし、どんな実証研究も、十分確認されていない何らかの現象を仮説を立て検証することで確定しようとするものであろう。通常、実証研究で何かが見出されたからといって、「新たなパラダイムへの道筋」が開かれることにはならない。

メルッチの提案でその可能性を担保しているのは、その仮説が、従来のパラダイムでは捉えられない現代社会の根本的に新しいシステム上の対立の存在に関わるからである。しかし、そのような仮説は明らかに「社会運動」研究領域に限定されたものではなく、現代社会全般に関わるものである。この仮説の提起が既存の現代社会理論を不十分として切り捨てた理由とも関わっているとすれば、その代案が、社会運動研究領域に限定される「中範囲の理論」に過ぎないというのは穏当に見えながら、ミスリーディングであろう<sup>14)</sup>。いずれにして

も、問題は、この仮説に基づくことで「新たなパラダイム」の道筋が開けるのか、である。

## 10.2 認識論的前提と分析枠組の構築

そのためにメルッチは『コードへの挑戦』第一部で、精緻な「集合行為の理論」を用意している。まず認識論的な確認が行われる (C21)。「社会現象が、われわれの視点から完全に独立して「そこにある」というようなナイーブな前提を放棄すべきである」と“客観主義的”前提が批判される。「社会運動」は、経験的所与としてあるのではなく、「経験的な集合現象の中にあるその他のレベルから区別される、集合行為の特定のレベル」である。そのような「分析的概念」と理解される時、社会運動も、この理論で扱われるその他の概念も全て、「分析者によって構築された知識の対象」となる。したがって、この理論は、その研究対象を「一方で行為の志向性に即して、他方で、その行為に関わる社会関係のシステムに即して、分解しなければならない」。

この方針に従って、社会運動は、「連帯」「紛争」「システムが許容する変動範囲の限界を超える」という三要素を含む集合行為の次元と定義される (C28f)。三番目の要素は、さらに準拠システムを特定することを要請する。システムは「単にその要素の関係の複合体」(C26)である。そのシンプルな規定は、社会的現実をなんらかの本質や形而上学的実体として特徴づけることの拒否に基づいている。個人や集団を要素とする社会システムは、いかなる時も特定のパターンを持つことを認知できる。「このパターンをシステムの構造と呼ぶことができる」(C50)。この構造に影響を与えない変異の範囲が、システムの許容の限界となる (C51)。社会システムは単一のシステムではなく、システムの複合体であり、メルッチは最低限として4つのシステムを区別している。そのうち最

14) 仮に社会運動論に限定したとしても、彼の試みは従来の社会運動研究領域の基礎にある「社会運動」概念自体を問い直すものである。それが領域限定的で済むであろうか？ また、従来の社会運動論は、客観的構造決定論が主観的意識かの二元論に規定されていることを問題にし、社会運動研究は「行為者とシステムの関係に関わる社会理論の中心問題に取り組もうとする者」(C381)に有益であるとする。そのような問題に取り組む者を、狭い意味での社会運動の実証研究者と自己呈示するより、社会の一般理論に関心があるという方がまだ素直に思える。メルッチが「一般理論」で何を意味し、「新しいパラダイム」とどう関係づけているのか判然としないが、少なくとも掲げている課題は、領域限定的な「中範囲の理論」で収まるようには見えない。後に触れる「社会システム論」特にその背後にある「生産の理論」(C45-8)は社会の基礎理論を展開しているというべきだろう。

も基礎的なものが「生産システム」であるとされ<sup>15)</sup>、当該社会の基礎的資源の生産・領有・配分に関わる。それは定義上敵対的関係を内在させている (C27)。

このような分析枠組を用意する分析者メルッチの目的は、現代社会の新しい紛争を析出することにある。逆に言えば、この枠組は「集合行為」の厳密な分類のためではなく、新しい紛争仮説を検証するために用意されていると言えるだろう<sup>16)</sup>。その仮説は、明らかに、社会の最も基礎にある「社会の生産システムをめぐる敵対的運動」(C35)の次元の析出に照準が合わされている。その「生産システム」が生産する基礎資源が現代では「情報」とされる (C228)。

以上のように、メルッチは研究対象を本質や形而上学的実体へと物象化することを拒否し、分析者の視点に相関的にそれが選別されていることを自覚して、自らの問題意識に即して分析枠組を用意しようとしている。しかし、そのような枠組でなぜ、社会の「基礎的」なシステムや「基礎」資源が特定できるのか？

### 10.3 ブレーキ2:「客観主義」批判の不徹底

メルッチは、システムの構造を正當にも常に観察者の視点に現れるとしている (C50)。システムの構造をみる観察者の視点は社会的行為者の主観的認知と必ずしも一致しない。行為者はその当事者である限り、自らが構成する関係の一要素となり、その要素のメタレベルに当たる関係そのものは、不透明にとどまる。もちろん、行為者も一旦自らの当事者性から距離を取りそれを反省する視点に立てば観察者同様、自らを構成する社会関係、つまりシステムの構造を見ることができない訳ではないが、同時に当事者であることはできない。

しかし他方で、観察者といえども、社会の外に出られる訳ではないことはメルッチの重要な指摘の一つだったはずである。確かにこの箇所でも、メルッチは観察者も観察されることは意識している。「この概念的操作は、常に観察者のポジションに相関的である（そのことは、いかなる時でも、以前の「システム」と観察者を含むメタシステム、新しい視点を設定できることを意味する）。つまり、あるシステムは常に観察者に対して特定されるが、その観察者が見ているシステムと観察者の両者を含むより包括的な観察者が常に設定できる、と

15) それらには「ヒエラルキーがある」(C28)。「生産システム」がもっとも基礎的であり、次に「政治システム」「組織システム」「生活世界（再生産システム）」が、それぞれより基礎的システムに依存しながら一定の自律性を持つとされる。

16) 「どんな分類も観察者がそもそも選別した行為の次元に依存するという限界を持つことに、常に留意すべきである。」(C30)

ということだ。

しかし、この論理を徹底するなら、全体を包括的・客観的に観察できる観察者を最後まで置くことはできないはずである。それができる観察者は、自らは観察されず、社会の外に立ち、超越的視点を詐称しながら、現実の最終審級を特定することになるだろう。しかし、メルッチは「集合行為の理論」の分析枠組に、社会には「基礎」資源があり、それを生産するシステムが社会の「基礎」的次元であると設定している。さらには、そこに敵対的関係があること、それを隠蔽する支配的社会構造ができあがることも理論的に前提とされている。

このような設定は単に「現実がある」というのではなく、社会の現実が特定の様式に構造化されていることが「客観的」に確認できるはずだとアプリアリに想定することになり、自らが出発点に置いた「客観主義」批判に反する措置であろう。確かに、ナイーブな客観主義ではないかもしれないが、その批判として提出した立場、すなわち何らかの本質や形而上学の想定<sup>17)</sup>のもとに「客観的現実」を前提にすることなく、現実を観察者の視点からの構築物と捉え返すという立場は不徹底に終わり、結局は「客観主義」の掌中に留まっていると指摘できるだろう。

しかし、実際には特権的な超越的視点などどこにもない。では、メルッチの「集合行為の理論」による「客観的現実」の構成は現実内部の何らかの立場から為されている状況定義を「客観的」とすることによって可能になっているはずである。メルッチ自身、ある箇所「敵対的運動は自らの文化システムの言語を使って、状況を、必要不可欠な社会的資源の生産者とそれ横領する者との間の闘争と描写する傾向にある」(C38)と述べている。とすれば、彼の分析枠組は、観察者として距離をとろうとしながらも、実際には、分析しようとする当の運動当事者の視点と一体化してしまっていることになる。それによってこの理論は可能になるが、それは当事者の状況定義に基づき、それを洗練しようとする性質のものとなる<sup>18)</sup>。

---

17) たとえば、情報が現代の唯一の基礎資源だと客観的に言えるのはなぜか。そこには、「物質 エネルギー 情報」と基礎資源が展開していく (P145: 199) という形而上学が入り込んでいないか？あるいは生産をめぐる紛争が敵対的と言うための前提に資源の希少性があるはずだが、それは情報資源にも妥当するのであるか？ たとえば「内的自然の管理は希少資源」(C109) というが、それは物質的資源が希少であれば必然的に排他的関係を帰結しなければならないのと同じ意味で使える言葉なのだろうか？ 他方で、情報は量的論理では考えられないところに特徴があると言うが (C193)、「希少」とは明らかに量的概念ではないか？

もちろん、特定の当事者の立場に立って、その視点から分析したり理論を構築すること自体は正当なことだろう。しかし、第一に、そのことはしっかり明示されるべきである。メルッチ自身「情報の権力の本質は命名する権力である」(C228)として、命名の背後にあるコードを明確にする必要性と、そこで知識の果たす役割の重要性を論じている。しかし、メルッチのこの記述箇所(C223-8)は、分析者は行為者と一体化して真実を告げるイデオログになるべきでないこと、知識が現実を反映するものではないこと、公共言説の一部であり、それに対し責任を負うこと、といった原則を語り、分析というより意識の高い知的営為の呼びかけのようになっている<sup>19)</sup>。ここでも自分の理論はその記述される現実の外部に立っているように見える。彼自身の理論の背後にあるコードも暴かれねばならないはずである。ただ、自らの立場を明示すれば「新しいパラダイム」へ至るという当初の課題が果たされるとは限らない。

#### 10.4 ブレーキのかかった「パラダイム革新」の帰結：「古いパラダイム」の延命措置

メルッチは確かに、集合行為、特に社会運動の経験的実体化を問題視し、それを構築主義的に研究すべく分析枠組を構築した。しかし、その分析枠組自体が、その集合行為が置かれる社会全体をある種の「客観的现实」へと実体化してしまっている。つまり、「社会運動の経験的統一性は出発点ではなく結果、既に自明のことではなく説明されるべき事柄として考慮されねばならない」(C40)という立場は、社会全体にまで徹底されていない。それは「パラダイム革新」へのアプローチが社会運動領域の「中範囲の理論」の枠内でなされるものだという自己限定とも対応しているだろう。

とすればメルッチによるその仮説の経験的検証作業の出発点は当然、従来の意味で「社会運動」といわれるような「集合行為」の経験的実在となる。そこ

18) メルッチは、「システム」など概念は単に分析のツールで現実そのものと混同すべきでないと言っている(C21, 77)。それは素朴な実在論を解体する必要からなのだろうが、最終的に「客観主義」に引き戻され、社会に内在する特定の当事者の視点からの現実規定であれば、「単に分析ツール」とは言えなくなる。ルーマンが似たような構築主義的試みから「システムは実在する」という立場をとるのは、「システム」を「分析ツール」に過ぎないとするこの中途半端さを問題にしているのだろう(馬場 2001: 16 参照)

19) 「われわれは現れつつある公共言説を本物の公共空間、つまり共同的な生活の意味・優先順位・目的が名づけられ比較される言語のアリーナへと拡張するために行動を始めることができる」(C228) など。

から出発して、「それ」を分析者が分析的操作によって構築物とみなし、その中に従来十分注意が払われていない新しい紛争を一つの分析的次元として確認していく。確かに、そのような研究が進むにつれて、その新しい次元をより重要な要素としている集合行為を注目することになり、その重要性が明らかになれば、集合行為の方もさらにその次元を重要な要素として自らを構築していくという循環関係は成立しうるだろう。しかし、メルッチの立場では、それは決して現実そのものではなく、あくまで分析的構築物である<sup>20)</sup>。新しい紛争次元そのものを体現する純粋な経験的集合現象はなく、現実の集合現象は常にそれ以外の様々な要素を含み持つ (C37)。

確かにこうした作業は、出発点となった従来の「社会運動」概念の見過ごされてきた次元を強調していくことになるだろう。しかし、従来の概念枠組から出発して、そこにうまくフィットしないアノマリーの存在の確認をいくら繰り返しても、それ自体「社会運動」概念の「創造的自己破壊」を保証するものではないし、「新しいパラダイム」へは至るとは言えない<sup>21)</sup>。むしろ、アノマリーの確認で留まっているなら、それは旧来の枠組の批判にはなっても、その批判自体が旧来の枠組の存在を前提にしており、その延命措置になりかねない。「新しいパラダイム」にはっきり移行するには、加えてどこかで視点と問題設定をはっきりと転換し、別の認識枠組を構築することが必要になるであろう。それこそ、本稿がこの補論の検討に先立って試みたことであった。

#### 10.5 「個人化のプロセス」テーゼの解釈 1：現代版「マイノリティ」の承認要求 (アイデンティティ・ポリティクス)

メルッチが「パラダイム革新」のアプローチとして設定する仮説は、情報時代の生産システムにおける敵対的紛争に照準を合わせたものである。その具体化が、彼の議論の中心にある「個人化のプロセス」のテーゼである。「一方で、

20) 注 18 参照

21) パラダイム論を提起したクーンの論点の一つも、古いパラダイムはその枠組に上手くフィットしないアノマリーの存在だけで革新されることはない、ということであった (クーン 1962=1971)。メルッチのシステム論の用語で言えば、アノマリーは「システムが自らの構造を維持することを妨げる」。にも関わらず「システムの構造の許容範囲の枠内に保とうとすれば矛盾が生じる傾向にある」(C53)。システムを構成する要素やその関係の性質や量の再定義に至る変化が「構造変化」(C51)である。「構造変化」「メタモルフォーゼ」「パラダイム革新」はアノマリーの指摘そのものではなく、それを受けて枠組を変える作業のレベルに定位している。



複合社会は諸個人が自らを自律的行為主体として自己認識アイデンティファイできるように資源を分配する。他方で、同じ個人に対して、複雑な情報回路の中の頼りがいのある性能の良い端末として機能するように「同 一 化 する」ことを要求する。アイデンティファイ・ウィズしたがって、システムの要求は矛盾している。同じ資源が分配かつ回収され、委ねられかつ管理下に置かれる。」(C93)。

そこでは、「装置の「ノーマル化」する合理性が、アイデンティティを自律的に定義する権利を求める集合的要求とぶつかり合う」(C110) ことになるだろう。運動に敵対するものが「システム」「装置」「合理性」などと抽象的に表現され、わかりやすいとは言えないが、「集合行為の理論」の分析視点が暗黙に「運動」の立場と一体化していることを踏まえると、行為者として自分(たち)という個別的存在の意味やアイデンティティを自律的に自分に納得いく形で定義し、それで社会生活を送ろうとしても、現実の中で「ノーマル」の名の下に不当に制約されている状況、特に「マイノリティ」とされる人々をイメージすれば理解しやすい。そのような行為者にとって「現実の壁」が感じられ、現実はまさに「支配構造」を持つ「客観的現実」と現れてくるだろう。

もちろん、何でも望み通りにしたいと言われてもそれは無理という当然の限界<sup>22)</sup>はあるにしても、実際には他の人々(「マジョリティ」)には当然に認められていることが不当にも妨げられているとすれば、それはシステムの構造の中立的必要性以上の特定の利害が擁護されている「支配構造」を感知させるであろう<sup>23)</sup>。そのことに異議申し立てをする紛争は、その支配的現実の定義を「ノ

22) 「個人化のプロセス」のテーゼは、フーコー的な権力による「主体化=従属化」といった議論を踏まえている。しかし、このテーゼの力点は、微細な領域にまで介入する権力による管理に諸個人が従順に飼いならされる(フーコー 1975=1977, 1976=1986)ということよりも、むしろ「システム」や「装置」も都合よく現実を構成するために、個々人に資源を渡さざるを得なくなり、それがシステムの支配や管理に一定の不確実性の余地を生むと同時に、諸個人が自律性のポテンシャルも獲得することにある。他方で、自律性を獲得した個人が気の向くままにどんなアイデンティティを要求しても、全て正当な反抗と受け入れられるわけではない。ノーマルなものが何もないとか、反抗することそれ自体を評価するという極論に振れるのは、権力の管理能力の過剰の評価と一対の誤謬であり、その点で、メルッチはフーコーだけでなく、ドゥルーズ&ガタリに同調しているわけではない(C 91)。この議論自体は、フーコー的な知見の批判的展開として十分魅力的なものといえるだろうし、「ノマド」の意味するところも、ドゥルーズ&ガタリのそれと安易に同一視するわけにはいかないだろう。

23) 前注と関連して、「構造的統合を脅かすものを抑制しようとするシステムの要請」には「純粋にシステムの必要に迫られた活動である」側面がある。しかし、その統合機能が支配的利害や特定の社会関係を保護することに奉仕する面もあることも確かであり、「支配的社会関係の許容範囲内でシステムを維持」しようとするのが認められる、とされる(C52)。

ーマル」なものとして作り上げているコードへの挑戦と認めることができる。

#### 10.6 枠内の政治還元主義批判

このテーゼの狙いの一つは、社会運動を狭い意味での政治に還元されないレベルの紛争を明らかにし、運動論の政治還元主義を批判することである (C197-204)。タローらの資源動員論は、「運動」が動員によって政治的成果を目指すことを適切に明らかにしても、新たに現れている、文化・社会的次元の意味やアイデンティティをめぐる紛争を単に「表出的」なものとしてまともに取り扱っていないことをメルッチは批判する<sup>24)</sup>。

確かに、「個人化のプロセス」のテーゼは、そのレベルの紛争が日常生活レベル、あるいは「プレ政治」「メタ政治」レベルで「隠れた有効性」を持っていることを明らかにする有力な仮説であろう (N72-9: 79-91)。その紛争は、制度化された政治領域に限定されない権力性を暴き出し問題化する「有効性」があり、「表出的」などとマージナルに扱われるべきではないという議論は説得力がある。しかし、この批判は、従来の政治学的な「社会運動」観が「有効性」を見出していない「表出性」に実は「政治的」有効性があると訴える図式になっている。

それは、まさに従来の政治の次元に還元できない「政治性」であり、だからこそ従来の市民社会と国家の間に制度化された媒介の仕組みでは、その意義を上手く汲み取れない。かつてのようにアイデンティティを所与として、単にその利害を媒介すればよいのではなく、アイデンティティが絶えず自律的に作り直されていく紛争だからである。それに見合った柔軟な「代表（表象）の公共空間」や民主主義の再定義が新たに求められる (C220-1)。逆に言えば、社会文

24) メルッチは、タローら「政治学者」が、運動の政治的次元の問題を強調するのは当然で正当なことだとしながらも、彼らがそれとは異なる自らの問題設定を理解しないことに不満を述べている (C198)。メルッチからすれば、それは研究上の「単なる分業」に過ぎないはずなのに、というわけである。しかし、このような発言も、メルッチの不徹底な立場を証言しているようにも読める。もしメルッチがパラダイム革新をめざして議論しているなら、古いパラダイムとは分業不可能な相容れない問題設定の枠組で作業しているはずである。それを単に分業にすぎない、なのに理解してくれないと不満を言うようでは、古いパラダイムに未練があるようにも聞こえる。実際彼の議論は中途半端なところに留まっていて、一方で政治社会学の枠内からは踏み出そうとしながら、他方でその枠内で理解されようとしていて、結果議論が曖昧になっているのではないか。それはパラダイム革新を掲げながら、古い枠組の中で穏便な理解を求める結果としての曖昧さであり、パラダイム革新作業に一定程度必然的な曖昧さと同一視し正当化すれば、むしろ新たなパラダイム確立の妨げになるだろう。

化的次元の紛争は、それに見合った新たな媒介の政治制度を持ってないと、「ノーマル」の定義を現実的に変え、社会の制度等へ実現していく回路を持たなくなり、周辺に追いやられ断片化しがちである。

こうした議論を展開すること自体は重要だろう。運動が「メディア」(C36)や「メッセージ」(C9)だというのは、確かに「表出的」と処理されるよりは運動理解を広げている。しかし、それが政治的媒介の再定義とセットになっているように、基本的に政治社会学の枠内で修正や拡張を求めるものであっても、従来の政治的な「社会運動」概念を転換するとまでは言えないであろう<sup>25)</sup>。その新しい次元を「プレ政治」「メタ政治」と見ることも、政治を軸にした視点を温存していることを示唆する。もちろん、新しい次元が政治と無関係と主張すべきだということではない。しかし、その次元の析出が、従来の視点や問題設定の枠内でなされるに留まるのでは、パラダイムの転換には届かないということである。

#### 10.7 客観主義的バイアスの引力

こう考えてくると、「個人化のプロセス」のテーゼを「マイノリティ」の承認要求（あるいは「アイデンティティ・ポリティクス」）のようなものと理解すること自体、「現実には支配構造があり、それをめぐる敵対的闘争がある」という「客観的現実」を暗に前提にするバイアスを受けているように見えてくる。この「客観的」前提自体、広い意味で「政治的」で、従来の「社会運動」概念とも親和的であろう。

しかし、アイデンティティが所与というよりは自律的に再構成され続ける構築物になれば、誰が見ても明白な差別や排除というのはむしろ認めにくくなるだろう。実際、差別や排除がなくなったわけではないが、歴史的に見ても、その傾向は認めてもいいだろう。それでも社会の現実は基本的に「マジョリティ」と「マイノリティ」の広い意味での政治的対立だと前提することはアンビバレントな効果を持つ。現代にもなお不当な扱いは残るだろうし、またそれが

25) 『現在に生きる遊牧民』の副題が原語では「現代社会における社会運動と個人的欲求」であったのに対し、邦訳では「新しい公共空間の創出に向けて」と変更されているのは、メルッチの議論の中心を社会運動と個人的欲求の境界領域に現れている現象に注目して「新しいパラダイム」を探求していることよりも従来の政治社会学の枠組内の新たな試みと位置付けることになってしまっている。しかし、そう読まれる要因はメルッチ自身の議論の仕方にもある。

見えにくくなったからこそ、それを暴き出すことの意義が増すとも言える。他方で、「マイノリティ」の要求のうち、不当な支配構造を暴く正当なものなのか客観的に無理といえるものなのか曖昧な領域が現れるだろう<sup>26)</sup>。曖昧な以上、安易に、不当な支配は解消され、あるのは客観的に中立な現実には過ぎないとしてしまうのは危険が伴うだろうが、「マイノリティ」側にも、支配的现实を過剰評価しすぎ、要求や紛争自体が自己目的化するリスクもあるだろう。

確かにこの領域でいつまでも「支配構造」が客観的にあるかどうかをめぐって争い続けることはできるし、そもそも原理的には終わりが無いだろう<sup>27)</sup>。

26) 注 22, 23 参照

27) 本文でこの後述べるような問題以外にも、どこまでが正当な要求でどこからが過剰な要求なのかの線引きは争えるにしても次第に些末な問題になることはあり得るだろう。また、「マイノリティ」は多少不利な状況に置かれているとしても、「マジョリティ」に呑み込まれるよりましだという感覚もあり得るのではないか。逆から言えば、「支配的现实」に保護され「ノーマル」でいられることが、却って自分のアイデンティティの輪郭を掴みにくくするという、贅沢といえど贅沢だが、現実味のある悩みもあるのではないか。

メルッチの「個人化のプロセス」のテーゼは、「装置」「システム」「道具的理性」「手続きの技術的中立性」(C9) の名の下で、特定の立場の優越が「ノーマル」として保護されることを問題にしているように読める。つまり、優越の立場の利害・目的・価値・考え方等々が中立な「ノーマル」とされて、他の立場の利害・価値などを抑圧するか歪め、支配的なアイデンティティへと適合させようとするのが問題とされる。この理解は、このテーゼを「マイノリティ」の承認要求的に解釈するのに対応しているだろう。他方で、このテーゼは「道具的理性」や「手段のシステム」(P59: 83) それ自体が支配だと言っているようにも読める。それは次のように解釈できるのではないか。

この場合、何ら特定の立場は明白に優越しておらず、またどの立場も明白に制約されていない。むしろかなりの程度どの立場もノーマルなものとして柔軟に受け入れられる状態に至る。その時特定の優越的な立場による支配とは別の意味で、支配が生じる。どの立場の目的も価値もほぼ同等に扱われる自由な状態に至ると、人はむしろどれを自らの目的や価値としたらよいのか決めかねるようになるだろう。メルッチ自身も、このような現象を「選択のパラドクス」(P44-5: 62-4) などと分析している。いまや選択の自由は制約されるのではなく、過剰になった。すると人は嫌でも選択せざるを得なくなる。選択しないのも一つの選択となる。自由な選択自体が義務となりストレスとなる。その時、特定の立場の支配を擁護していたはずの、技術的中立性、道具的理性に過ぎない手段のシステムや装置が、それ自体として、むしろ選択の手掛かりを与えないまま現実を構成している点で、われわれをいわば「支配なきまま」支配しているのではないか。目的や価値、アイデンティティの手掛かりのない中では、とりあえずの手段だったものが自己目的化し、手掛かりとされるかもしれない(貨幣が手段の自己目的化であることを想起せよ)。この方向の解釈は、本文中で後に出てくる「個人化のプロセス」のもう一つの解釈と対応しているし、ある意味でメルッチの基本的論点と言えるかもしれない。しかし、それが特定の利害を擁護する支配構造が客観的にあるという現実定義を先においてしまうことで、上手く引き出せないでいないのではないかと、というのが本稿の主張である。

しかし、メルッチがこのテーゼで確認しようとしていたのは、現代社会に特有の新たなシステミック・コンフリクトであったはずである。ただ、紛争があればよいわけではないし、実際、「マイノリティ」の承認要求であれば、その種の紛争は近代社会を通じて行われてきているもので、それ自体は特段新しいシステミックな次元と関わっているとは言えない。古くからある問題設定の枠内で、「マイノリティ」の在り方も多様化・現代化し、それに見合った対応は学問的にも政治的にも重要であろう。しかし、その次元の紛争を社会の基礎的次元に据えても、それは新しい問題設定への転換にはならないはずである。

「個人化のプロセス」のテーゼを「マイノリティ」の承認要求の現代版と理解するのは、一方に支配的な現実があり、他方に自律的に自らの行為の意味やアイデンティティを構築できる行為者がいるという「客観的現実」を前提にして、両者の紛争の現代的形態を検証する仮説として、そのテーゼを用いるということであろう。そのような「客観的現実」の指定は、従来より政治社会学的な研究の基礎にあるものであり、いわばその引力圏内に、新しい次元を取り出そうとする議論を引き戻す効果を果たしている。

#### 10.8 「個人化のプロセス」テーゼの解釈2：個人が個人になる闘争

しかし、「個人化のプロセス」のテーゼが問題にしようとしたのは、その前提にある、そもそもの客観的現実の構成自体、あるいは自律的な行為者の構成

---

メルッチの議論の中で、この二つの次元が十分整理して取り出せないのは、基本的に前者の次元の枠内の「古いパラダイム」で後者の次元を言おうとしているからだろう。だから、「個人化のプロセス」のテーゼは、「支配」に対する敵対的紛争を問題にしているのか、「支配」そのものよりも紛争が示すジレンマの表現 (C218) なのか、あるいは、問題は、社会文化的次元での紛争それ自体なのか、その紛争の場の設定なのか (cf. C110)、といったことを十分明解に言えなくなっているように見える。

また、「ノーマル」を押し付ける権力装置があるとすれば、普通に理解すれば、特定の規範によって行為者の自由の制約が問題となる。しかし、自由であることが「ノーマル」となりそれが押し付けられるに至り、特定の規範に制約されないことが規範となれば、事態はパラドキシカルである。自律的に意味を生産すること自体が困難になる。それがさらに徹底すれば、そもそも「ノーマル化」し規律訓練する権力自体が支配に不要になるかもしれない。このようにフーコー的な規律訓練型権力の主体形成の論理が反転していくことを歴史的段階に対応させる議論としては、大澤 (2008) やパウマン (1998=2008) などがある。現実には様々な「支配」があるかもしれないが、歴史的には最も贅沢な悩みに見える、自由過剰に困るというようなアイデンティティの問題にきちんとした対応が考えられない限り、論理的にはその他の問題の解決を有意味に考えることができなくなるだろう。本稿は、メルッチの議論をその方向で理解しようとする試みでもある。

自体が、新しい次元の問題として現れてきたということではないか。

「個人化のプロセス」のテーゼのポイントは、権力は外在的に存在するのではなく、行為者が自律的行為者になるその内的プロセスに介入する点にある<sup>28)</sup>。言語や情報のコードを通して、そのプロセスを操作するとしても、それは決して一方的に押し付けられるわけではなく、行為者がその言語や情報を理解し同意するプロセスを通してしか達成できない。逆に行為者も権力関係の外部ではなく、その一部である (C227-8)。とすれば、権力との闘争は、行為者が自律的行為者になるプロセスの内側でなされるということになる。それは、自律的行為者になるという困難とそもそも当人が自覚的に向き合えるかどうかという次元に関わっている。こう解釈するとき、そのプロセスの結果として自律的行為者や客観的現実がどう構成されるかは所与ではなく、それ自体が重要な紛争として現れてきたことを指摘しようとしているのが「個人化のプロセス」のテーゼだということになる。

行為者として自分（たち）という個別的存在の意味やアイデンティティを自律的に自分に納得いく形で定義した人が、いざそれで生きていこうとすると「現実の壁」にぶつかり、その「支配構造」を問い直すというのは十分意味ある問いであるし、今日もまったく意義を失っていないだろう。しかし、「個人化のプロセス」のテーゼをそのようにだけ解釈すれば、新たな問いは、それを開こうとする試みによって、むしろ閉じられてしまうことになる。個人・集団・社会が、その個別的存在の意味やアイデンティティを自律的に納得いく形で定義することはそもそもいかにして可能かという新たな問いを明白に開くには、9節までに析出した新たな視点からこのテーゼを捉え返す必要があるだろう<sup>29)</sup>。

#### 10.9 「新しいパラダイム」の捉え返し：新しい問いの明確な設定

唯一の超越的観察者を詐称し情報時代の新たな紛争の次元を確保しようとするれば、それは自律的紛争主体とその外部の支配的現実の対立が客観的に成立し

28) 支配的コード、さらにはマスターコードという形で、圧倒的に人々を支配するコードが客観的にあると言っているように読めるところもある (C179)。他方、メルッチがコードということで強調しようとしていることは、仮に力の差や不均衡があっても、それが物理的な差のような形で一方的ではなくなるということである (C228)。

29) 循環的な事柄を直線的に記述するのは困難である。9節までの議論を踏まえて10節の補論は書かれているが、10節を踏まえて再び9節までの議論に再度立ち戻ることのできるような構造の記述を本稿で試みたつもりである。

ている構図を現実の上に外挿しなければならなくなり、結果的に、当初の狙いとは裏腹に、新たな紛争次元の問いは閉ざされてしまう。それを確認して翻って見れば、この補論の前に取り出した「新しいパラダイム」の意義を再確認できる。

自らが現実の構成に循環的に巻き込まれていることを否認せず、むしろ積極的に認め、その上で特定の経験的次元ではなく、その可能性の条件に関わる超越論的問いの次元において、他方ではなく一方の<スタンス>を引き受けていくことは、それ自体が紛争的である。しかし、それを引き受けスタンスをとることで、もはや追加的条件を持ち込まなくても自ずと、眼前で起きている社会的現実やアイデンティティの構成が紛争的になされていることが社会研究の中心的問いとして新鮮に現れてくる。そして、それは「アイデンティゼーション」など、その他の有意義な洞察と素直に連結でき、「社会運動」概念の再定義を示唆することはすでに確認したとおりである。

社会研究の課題は、もはや現実をより良く客観的に反映することではなく、その循環的構成を認め、その循環を妨げている要素を確認・特定して、個人・集団・社会が、自らの個別性をより深く納得いく形で構成できる認識装置を準備していくことになる。メルッチの議論に潜むミスリーディングな箇所の指摘は、そのような作業の一端でもあり、メルッチ理論の今日的ポテンシャルを一層明確にしていく試みでもある。

もちろん、メルッチの議論をこのように再構成するののも一つのスタンスに過ぎない。また本稿では「新しいパラダイム」の析出というスタンスからいわばネガとして扱った政治社会学の現代的展開は、それ自体としてみれば、現代運動の政治性を考えるという問題に即して使い尽くす意義はもっとあるように思う。しかし、ここで析出した「新しいパラダイム」の礎は、他の社会理論や現実を検討していく中で、更に彫琢していく価値のあるものだと思われる。

#### 文献

東浩紀, 1998, 『存在論的, 郵便的 ジャック・デリダについて』新潮社。

馬場靖雄, 2001, 『ルーマンの社会理論』勁草書房。

Bauman, Zygmunt, 1998, *Work, Consumerism and the New Poor*, Open University Press. (=2008, 伊藤茂訳 『新しい貧困 労働, 消費主義, ニュープア』青土社。)

Foucault, Michel, 1975, *Surveiller et punir, naissance de la prison*, Gallimard (=1977, 田村俶訳 『監獄の誕生』新潮社。)

, 1976, *La volonté de savoir (Histoire de la sexualité, Volume I)*, Gallimard. (=1986, 渡

## 社会イノベーション研究

- 辺守章訳『知への意志 性の歴史 1』新潮社。)
- 長谷川啓介, 2006, 「情報時代の社会運動研究の新しい課題 - カステル理論とメルッチ理論の相補性について - 」新原道信ほか編『地球情報社会と社会運動』ハーベスト社。308-23)
- 石川文庫, 2009, 『カントはこう考えた 人はなぜ「なぜ」と問うのか』ちくま学芸文庫。
- Kant, Immanuel, 1787, *Kritik der reinen Vernunft* (=1961-2, 篠田英雄訳『純粹理性批判(上)(中)(下)』岩波文庫。)
- Kuhn, Thomas, 1962, *The Structure of Scientific Revolutions*, University of Chicago Press. (=1971, 中山茂訳『科学革命の構造』みすず書房。)
- 熊野純彦, 2002, 『カント 世界の限界を経験することは可能か』NHK 出版。
- Luhmann, Niklas, 1984, *Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeinen Theorie*, Suhrkamp. (=1993-5, 佐藤勉監訳『社会システム理論(上・下)』恒星社厚生閣。)
- Melucci, Alberto, 1989, *Nomads of the Present: Social Movements and individual Needs in Contemporary Society*, Temple University Press. (=1997, 山之内靖ほか訳『現在に生きる遊牧民(ノマド) 新しい公共空間の創出に向けて』岩波書店。)
- , 1996a, *The Playing Self: Person and Meaning in the Planetary Society*, Cambridge University Press. (=2008, 新原道信ほか訳『プレイング・セルフ 惑星社会における人間と意味』ハーベスト社。)
- , 1996b, *Challenging Codes: Collective Action in the Information Age*, Cambridge University Press.
- 長岡克行, 2006, 『ルーマン / 社会理論の革命』勁草書房。
- 中河伸俊・北澤毅・土井隆義編, 2001, 『社会構築主義のスペクトラム パースペクティブの現在と可能性』ナカニシヤ出版。
- 大澤真幸, 1996, 『虚構の時代の果て オウムと世界最終戦争』ちくま新書。
- , 2008, 『不可能性の時代』岩波新書。
- Spencer-Brown, G, 1969, *Laws of Form*, George Allen & Unwin. (=1987, 大澤真幸ほか訳『形式の法則』朝日出版社。)
- 竹田青嗣, 2010, 『完全解説カント『純粹理性批判』』講談社。
- 上野千鶴子編, 2001, 『構築主義とは何か』勁草書房。
- 内田義彦, 1971, 『社会認識の歩み』岩波新書。
- 山之内靖, 1996, 『システム社会の現代的位相』岩波書店。